関西自然保護機構会報（15）35—36，1988.

# 淀　川　で　泳　ぐ

藤　田　修　二

（毎日新聞学芸部）

私は名古屋市内で生まれ，3歳の時空襲で市内から約20km北に離れた母の実家に疎開して，そこで5年間を過ごしました。その後また名古屋へ戻りましたが，私の古里と言えるのはこの濃尾平野の真ん中の農村地帯（いまは工場や住宅が建て込んでいます）をおいてほかはありません。

山はありません。木曽川から引いた農業用水路が発達していて，早春から晩秋まで水とたわむれました。3歳のころは幅数10cm，深さもヒザまでぐらいの溝のようなところ。それから次第に出世して深く，幅の広い水路に行くようになり，小学校に入るまでには，背の立たない大きな川で遊泳するようになりました。子供の間で年齢による階層があり，いっぺんに大きな川へは入れてくれませんでした。たいてい集団で遊んでいますから，みんなよく溺れかかりはしましたが，事故が起きたことは，記憶にある限り1度もありません。

春先，初めて水に入る時の冷たい水とその匂い，夏の生あったかい水と水際の草いきれ。水の中でなにかの拍子に小魚に触れた時の驚き，今も脳裏にしみついています。それだけではありません。釣り，もんどりを仕掛けての魚採り，そして秋の村総出の川ざらえ。

子供の感性を豊かに育てる素材が川とその周囲にはいっぱいありました。コンクリートのプール遊びの平板さとは比較するも愚かなことです。

こういう私の原体験を前提にして淀川を考えると，どうしても「親水」という言葉がイメージされるのです。

「治水か自然保護か」とよく言われてきましたが，二者択一ではなくどちらも大事。あえて言えば，スポーツ公園的な要求の声が大きいのであれば，行政としてはある程度その種のものも造らざるを得ないこともよくわかります。ただ，これだけの大河が，これだけの大都会の真ん中を，しかも豊かな自然を残しながら流れている，これを生かさない手はありません。ところで，これまでの自然保護側の運動は，鳥にしても魚にしても植物にしても，観察対象がいて，こちら側に人がいてという具合に，どうも体感的でない。自然との間に距離があります。子供たちが川の中に入ってたわむれる泳ぐ，そういう遊びができるよう提起することはできないものでしょうか。神戸の住吉川，都賀川，京都の白川では，親も子もこうして遊んでいるのです。

淀川でも，三川合流点の，水のきれいな木津川が流れ込むあたりの「半自然地区」などでできないものかと考えます。低水敷と高水敷を切り離すのではなく，親和させる，人と水を親和させる。魚がいて，周りには草も茂っている。それだけで子供たちにどれだけの感興を呼び起こすことでしょうか。

水質，安全管理，母親たちの意識など，問題はありますが，いちがいに不可能と思わずに，この実現を展望する中で，市民の水質への関心が深まり，豊かな自然への興味がいや増していくと考えたらどうでしょうか。これは決して突飛なアイデアではありません。既に7年前に出版された大阪都市環境会議編の「おおさか原風景　水都再生へのパースペクティブ」では，2010年になんと堂島川で水泳大会を開催しようと呼びかけています。この意気込みに共感します。なにせ，大阪の市民は明治の末ごろまで，大川の水をそのまま飲み，大正時代まではそこで泳いでいたのですから，泳ぐぐらいは復活させたいものです。

淀川は巨大な排水路でいいのか，それとも自然豊かなオープンスペースとして保護，再生させるのか，これはいってしまえば市民意識，文化の問題であります。このところ，建築学を中心とする文化の世界でよく「ポスト・モダニズム」ということが言われます。機能性・合理性・経済性のみを追求してきたここ何十年のやり方を反省し，それを乗り超えようという思潮です。その行く末は必ずしも明確でないし，むしろ混とんとしていると言っても怒られはしないでしょうが，こうした発想が出てくる根本はよくわかります。これがなぜ川をいじくる河川工学者や行政官にないのか不思議で仕方がありません。巨大な排水路はまさに機能至上主義の考え方であって，

関西自然保護機構業績第52号

人間の意識を奥深いところからゆさぶる創造的なイメージは何もありません。

河川工学者や行政の人たちの勉強，そして大いなる奮起を望みたいのですが，最近，私はある市民運動のリーダーから手紙をもらいました。そこにはこう書いてありました。「何をやるにしても，市民の盛り上がり，意識変革なくしては，学者，行政の変革もありえない」と。確かにこういう側面を無視することはできないでしょう。だとするならば，15年前，淀川の自然を守る会が出来たころの盛り上がりはどこにいったのでしょう。世の中全体的に住民運動，市民運動が低滞気味です。淀川の自然を守る運動もこの大きな流れの中に位置付けられないこともない。しかし元気印の運動もある訳ですから，大きな文化運動として，淀川の自然を守る運動が再発展していくことを願ってやみません。